
S.D.F ZERO ? - ?

K-hell

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S・D・F ZERO ？ ？

【Nコード】

N89410

【作者名】

K-hell

【あらすじ】

S・D・F・ZERO？の第三章。混乱する小倉市内でクリーチャーと戦う人類に勝ち目はあるのか。バイオロイド、クリーチャー、大地震の三つのキーワードが重なるとき世界は終焉へと向かうのであろうか。

REST―北九州の戦い―

北九州をクリーチャー共の巢として人類が明け渡すことになったのは08年8月7日である。そして今、小倉が危機に陥っていた。福岡、飯塚、山口の自衛軍は、すぐさま北九州市へ援軍を送った。ここから小倉危機、関門海峡封鎖作戦、福岡陥落と負の連鎖が続く。まだ8月3日の夕方である。長い5日間の恐怖に付き合えない方はどうぞお引き返し下さい。

1>小倉危機(上)

「うちらが行ったトコは、みんなクリーチャー災害地や」

金髪の女性自衛官はへらへら笑っている。クリーチャーとかいう化物と闘いづけの毎日で頭の思考回路がいかれてしまっているのだろう。ジープは小倉の南を走っていた。運転をする外人の大男は道端に転がる死体を平気で踏みつぶしながら車を走らせている。この2人は何か変だ。それは壊れた日常のせいだ。黙りこむオレンジ色の覚醒者のルイ。ルイはツバキが無事に生きていることを祈っていた。瞳がオレンジ色だからという理由で南へ向かうジープに乗せてもらっている。それも理由として変。こんな人達と長く一緒にいたくない。普通感覚を持つ人が恋しい。

ここまで来るまでの話に戻ろう。ルイと彼女の首にかかる私はついに絶対絶命となった。死なないクリーチャー。倒しても倒しても立ちあがる。こいつらが他の雑魚と違うのはわかる。霧吹きのような毒をばら撒きながらのろろ歩く。それがルイの体力を地味に削っていた。ルイを囲む6体のクリーチャー、もはやルイはナイフを持つ手に力が入らなくなっていた。

「ここまで…でいいや…死のう」

「ルイ諦めるな、闘うんだ！」

ルイはらしくない弱気を吐く。私はそんな覚醒者を叱咤するしかできない。ルイの身体へ私の同期は依然できない。私は無力だ。とうとうルイはナイフを捨てた。降伏と手を上げた。愚かだ。私は人の血が通わないクリーチャーに負けた人間の末路を何度も見てきた。それでもルイは死を選んだ。私はルイの身体が凌辱されるのを見ているだけの存在になっていた。ここまでかと諦めかけたときだった。

「イーヤホー」

軍用の装甲車が突撃してきた。乱射する金髪の女。間髪ルイはうずくまり、弾道を避けた。この女はルイまで殺害する気か。私は思わず罵った。死体が転がる大地に急停止した。ジープから女が手を伸ばす。こいつら殺しても死なない。時間がないのだ。

「早く乗りい！」

どことなく関西系の声。ルイは駆ける。追ってくる犬ども。死の駆けっこ。ルイは寸で車内へ飛び込んだ。犬どもは女が全射殺した。奴らの臓物を浴びた女は喜悦満面だった。

運転する長身外人は終始無言。車をすぐ急発進させた。関西女と無言外人。ちぐはぐコンビに警戒心があるのだろうかルイは肩で息をしながら様子を窺っている。私は大人の対応をするべきだと思い、ルイの代わりに礼を述べた。今のルイはツバキのことだけで気持ち一杯過ぎた。当然関西女は奇異の目で私を見ている。ペンダントが話すから可笑しいのだろう。子供のような純真無垢な瞳がでかい声で叫ぶ。

「自分は何なん？宇宙人、未来人、超能力者かいな」

耳はないが裂けそうで痛い。恐るべき関西。私は事の始終を短くして話した。そしてツバキという青年を探していること。関西女はノリがいいので話しているだけで良い反応をする。鬱々としていたルイも少しだけ表情が和らいだ。

「あいや、自分らは異世界人やん。うちの予想を遥かに超えよったわ。かつこええな…異世界人。人探しをしとるんやったらうちらもやで。黒髪のツインテの娘を探しとんのや」

2人の正体はさて置き、彼女たちの尋ね人は意外だったのだがそれは後ほどわかる。金髪関西人はホウセン。運転手のクールガイはどこかで聞いた名前のキール。探し人の少女を合わせて三人は福岡のクリーチャー地獄から脱出してきたそうだ。ちよつと待てよ。となると第四師団はここに援軍に来ない。さらに熊本西部方面自衛軍本隊も福岡で足止めだな。ホウセンは関西出身だからそこら辺はさっぱりやわと放りなげた。キールが始めて口を開く。

「ニヒマルさんよ。あんた達の世界とこっちの世界が連動しているかわからないが、九州のほとんど自衛官が福岡で闘っているのは間違いない。頼るなら隣県の山口の部隊だろう」

私はキールを信用できなかった。所詮逃亡兵だろう。敗軍の将に口なしだ。思い出したようにホウセンは辛気臭い私の話を掘り返した。

「日本のお偉いさんが世界中にウイルステロな…それ全然笑えへん。うちのない頭で考えたんやけど、自分らの話の方が信用されへんよ」

ホウセンはキールを軽く見た私にアヒル口だ。確かに逃亡兵の方が

話はまだマシだ。私はデータを2011年から現在に戻していなかった。ルイも同じ。だから思い出すまで時間がかかったのだ。

ルイが突然目を見開いてキールを襲った。

ガスト・キール・トツシユは前の世界でルイをサイタマスラムから連れ出した人間だった。しかしルイにとってすでに死んだ存在。運転する亡霊がルイの緊張の糸を切った。私のバックアップが完了したときにはもう遅かった。

「偽物め、クリーチャーが化けてたのね、殺してやる!!」

「やめいや、あ、あかん!ぶつかるで!!」

壁を避けたが、暴れるルイのせいでハンドルを切り過ぎて横転した。ルイは車外に放りだされて頭を強打し流血していた。私はアスファルトの上だ。キールとハウセンはまだ半壊した車の中だ。ハウセンがようやく這い出てくる。信じられないのだろう。首を横に振って現実と闘っているようだ。

「ホンマにあかん…右手首と左の太ももの骨が折れとるわ」

キールはまだ車内だ。身体を挟まれて身動きできないまま意識を失っていた。血の臭いに誘われて犬どもが駆けてきた。道路の上で私はまたなす術がなかった。

「うちの命もここまでやわ…ユウナちゃん、うち先逝くで」

ユウナという少女の名を始めて出し、ハウセンは運命を受け入れたかのように目を閉じた。すりむけた頬に涙が伝う。

血に飢えた犬どもとの距離はすぐだった。後方から強烈な閃光。対戦車両誘導砲弾が一発、犬どもに直撃した。犬どもは断末魔とともに碎け散った。巨大なバズーカ砲を抱えてきたのは、右目が赤く瞳にクロス型紋様が入っていたので黒衣の死神に見えた。いや異常なまでの白い肌で黒髪のツインテールで黒衣をまとう少女だ。そして迷彩服とヘルメット姿の青年があとに続く。手には自動小銃。黒煙の中から襲いかかってきた犬の生き残りの正中線を撃ち抜く。

「ユウナちゃん、ホンマにユウナちゃんや…」

奇跡を泣き笑うホウセンにユウナと呼ばれた少女はどこか大人びた感じた。

「助けに来たわけではない。私は皇子に導かれたまでだ」

ユウナは少しデレて目を皇子に向ける。皇子ツバキはヘルメットを取り、ルイと私のもとに歩み寄った。

「生きていたのか…無事で何よりだ」

「ごめん、遅れた」

私はツバキの手に拾われた。この世に偶然はない、あるのは必然だけだ。出会いはいつも必然だ。奇跡は起こるものだな、私はしみじみ思った。

2＞小倉危機（下）

ようやくツバキが平尾台へ着いた頃、少年はやつと目が覚めた。少年は名前を鹿島浩カシマヒロと言った。何と日本の首相の御息だそうだ。あの背広の青年は少年のSPだったらしい。SPのお兄さんの死は少年にとって重い現実だったらしく、顔をうつむかせていた。元々、

カシマ少年は肺に病気を持っていて小倉の病院に入院していたそう
だ。そしてこの小倉危機になった。うつむいても少年は泣かない。
気が強いのは野党とマスコミから叩かれる総理大臣の父親似なの
かもしれない。

他の被災民は丘から見える炎の海と化した街を絶望の眼差しで見
ていた。みんな目から生気を失っていた。だが、そのうちの一人がツ
バキの正体に気付いた。例の中国の南京豪雨で視察していたツバキ
は日本人にも馴染みの顔だった。

「お前がみんなを見殺しにしたんだ。見ろよ、お前が運んだ不幸の
せいで、小倉が火の海だ！帝国のクスめ！！さっさと国に帰って泥
水でもすくつてな！！」

理不尽だ。少年は理解できてないらしくツバキと喧嘩を売ったおっ
さんを見比べている。ツバキはカシマ少年の手前耐えていたが、自
分のした行為を罵られたことについて我慢できなくなった。草食皇
子のツバキが大勢のヒトの前で怒るのは珍しいのだ。

「うるさい、帝国を馬鹿にするな！僕は負けていない、お前らが逃
げて僕も逃げない！3日以内にクリーチャーを一匹残らず殺して
やる！」

堰を切った逆切れ。日本人被災民の男はツバキを殴り飛ばした。理
不尽だ。僕が外国人だからってこの国のヒトは不幸を押し売りする
のか。周りで見ている傍観者もそうだ。僕はこの国に責任をとれな
い。もう一発拳が飛んでくる。いや、拳は黒衣の死神が押さえてい
た。少女は不健康な白い肌、そして裁判官のような何色にも染まら
ない黒衣、目がヒトを呪い殺しそうな死んだ魚の色だ。

「無様だ。自分の家の火事を消そうともしないで、他人に罪を擦りつける。お前は腐ったトマトだ。暴力はいけない…彼の痛みをその手首で償え」

細身の少女は大人の男の手首を難なくへし折った。男は声にならないう叫び音を口から出してうずくまった。カシマ少年が腰を抜かしている。周囲の冷めた空気でツバキは冷静さを取り戻した。醜い。大勢の人前でツバキは怒ったことを自省した。病院以来、少女とは二度目の対面だ。冷徹な空気の根源の顔はまだ高校生くらいに見える。そう、彼女がヒトを超えて半クリーチャー化した人間の東雲有奈だシノノメユウナ。つた。

3＞関門海峡封鎖戦（？）

私には強がつているようにしか見えなかった。ルイはクリーチャーの力に吞まれ、記憶を蝕まれ、そして倒れた。ツバキは世界を恐れ逃げているだけの腰ぬけと罵られた。シノノメユウナはルイの暴走で仲間を負傷させられて、自分のプライドを大きく傷ついた。負傷したユウナの仲間とルイ、そしてカシマ少年は自衛隊の先導で飯塚へ撤退した。誰が小倉に残るかで自衛官たちはもめていた。それはいまだ山口からの援軍はなく、小倉駐屯地の尉官クラスの幹部が次々と戦死して、彼らの戦意を奪っていた。それとは関係なく、結局残ったのは闘う理由を持つユウナと逃げ場のないツバキのちぐはぐな2人だった。

「私が残る…腰抜けどもとは違う」

「無謀だ。いくら君が強いとはいえ一般人だろう。ここはみんなに合わせよう」

ツバキはいつになくキツイ口調だ。しかし言葉に重さがない。すでに軍隊は彼らの意中を聞くまでもなく後退していた。さらに一般論

はユウナにとって馬耳東風だった。

「黙れ…これは私の父が起こした問題だ。私はこの身が朽ちるまで闘い続ける。四肢が引き裂かれようと歯で食いちぎってやる」

ユウナの覚悟をツバキは正面から見ることとはできなかった。ツバキは自分だけが逃げるわけにいなかった。あいまいな態度は自分を不幸にする。ツバキの口が閉じる。頑なな子だ。仕方ない。私はユウナにツバキの言葉を詫びて、彼女が闘う理由を尋ねた。

「ユウナ、君をそこまで動かす理由を差し支えなければ教えてくれないか」

彼女はツバキ、いや彼の首に下がる私を長いこと見下していた。混沌とした黒眼が『お前に私の本心がわかるものか』と僻んでいるようだった。確かに他人の痛みは他人のモノでしかない。しかもヒトでない私が理解できるか怪しいものだ。そうではなくてお節介かもしれないが、ツバキに聞いて欲しかった。彼女の痛みをツバキが少しでも理解できれば、この場合は沈黙化するんじゃないか。ユウナは小さい口をようやく動かし始めた。

「私はシノメ教授のたった一人の娘だ。教授、私の父はこの世界の秩序を壊した人工生物の制作者だ。クリーチャーは父が創り出した生物の失敗作である可能性が高いと思う。父が何を始めたのか、クリーチャー殺しの能力を持つ私はわからない。実の娘でさえ、モルモット程度にしか…自分の研究の一部としか…思っていないのだから」

ユウナは痛々しい顔を下に落とす。ツバキは彼女が吐きだした言葉の重さで更に沈んだ気分になった。感情がない端末の私はひっか

ることがあった。ユウナの迷いを感じる『思う』という曖昧表現だ。感情がない分、敏感な私は諫言を吐ける。

「ユウナ、闘うことを止める。父親といえど所詮君ではない他人だ。君の言葉は悲壮感と劣等感が80%、迷いが残り20%だ。君の思いは例え人間でなくても理解し難い。このまま君が闘う道を選べば、人間から否定せられ、罵られ、絶望のまま見知らぬ地で果てる」

ユウナは始めて大人に怒られた子供のような顔になった。私が『怖い』だって、わかっているさ。いくら感情のないPC端末とはいえ、『心』が痛まないわけない。これで何も感じないならツバキは死んだ人間と同じだ。ツバキは唇をかんだ。握りしめる拳で辛うじて震えを抑えていた。ツバキの嘘がばれる。

「僕は、僕は、『ツバキ』じゃないんだ。ツバキ兄さんは死んだ。僕の身代わりになって。関西で地震があった5カ月以上前に地下鉄に撥ねられ死んだ」

ユウナは当然ながら、私でさえツバキの言葉の真意がわからなかった。つまり、如月鐔葵はすでに死んでいる。中華内乱は起こり様がない。

ユウナは鉄仮面のような表情に戻っていた。ここからは私がツバキと呼んでいた青年の回想である。

REST―蒼衣の絶望―

僕は韓国総督代行の兄をもつ弟でしかなかった。キサラギアオイ、それが僕の本名だ。帝国の決まりごとで第二子の男児だった僕は、消される存在だった。男子一系世襲は、かつて争いに明け暮れた帝国が安寧を求めて作った不文法だった。親の絶望を見てみたかった

よ。女の子だったら政略に使えただろうからね。

つまり、不要な僕は何らかの形で総督継承権を捨てなければならなかった。方法は3つ。赤ん坊のうち殺す。他の分家の養子になる。そして去勢する。僕はそんな事実とは無縁で女の子として育てられた。女の子のように大きい目が僕を死から救った。目千両。周りから怪しまれることなく思春期まで過ごした。でも僕の苦悩は続いていた。膨らまない乳房と女の子にはないものが下半身にあった。

やがて分家に出されて気付いたのだ。僕は国を捨て、日本人となった。日本人は優しかった。そういう人種に抵抗がない文化のおかげだったのかもしれない。でも陰で僕のことを笑っているヒトがいたことも知っていた。僕は帰る国も性別も人生まで国から凌辱された恨みは腹違いの兄へ向かった。この手で絶対に兄を殺す。その前に確かめることがあった。

こんな僕にも兄は優しくかった。僕の辛さを知っていたからかもしれないし、内心嘲笑っていたからかもしれない。仮装女子大生になっていた僕の入学祝いで、本国の軍隊の訓練でなかなか日本へ来れなかった兄がやってくる。僕の心中は穏やかでなかった。男性用スーツが似合う兄はそのときの僕にとって目障りだった。

兄はいつもの調子で笑った。

「ごめんな、アオイ。軍事法の改正で大規模な部隊の変更を食らったんだ。俺も抜け出せなくてさ…お詫びのイヤリングだ」

僕は怒ってない。むしろ恐れていた。女装しかできない細腕で兄を殺せるのか。

「しかし、日本の女の子の格好ってかわいいよな。アオイもすっかり美人だ」

「からかうなよ。僕は好きで着ているわけじゃないんだ。それに男物は似合わないんだ」

一瞬兄さんの目が鋭くなった。何だよ、もしかして計画に気付いたのか。

「アオイ、俺にお礼はないのか」

そっちか。やっぱり兄さんは律儀な韓国人だ。僕はどもりながらお礼をいった。昔みたいに大きい手で頭を撫でられた。素直に笑えないよ。それどころか寒気がした。兄さんは妹の反応に戸惑った。

「アオイ、顔色悪いぞ…寒いのか」

「ううん、全然違う…」

違う、僕が間違っていた。結局兄さんは殺せなかった。翌日、兄さんを地下鉄のホームまで送った後に全てを終わらせるつもりだった。一切女装はしなかった。長い髪は後ろで一本に束ねた。服装は無地のTシャツに紺のジャケット、ジーンズと僕ができる限界の男装だった。電子掲示板がもうすぐ次の電車がくることを告げる。僕はその線路の上に身投げした。もう輪廻を断ち切ってしまうおう。

「アオイ、大丈夫か！」

兄さんが何故か僕の身体を支えていた。

「なんで戻ってきたんだ。僕は昨日一日中、あんたのことを殺そうと気を張っていたんだ」

僕は兄さんの口が歪んだように見えた。額から出血したせいで兄の顔がわからない。その顔は笑っていたのか、それとも泣いていたのか。

か。兄は近くのヒトに僕の身体を引き上げらせると自分は戻らなかった。身投げした僕ではなく、兄が電車に撥ね飛ばされた。助けられた僕の目には、幸いなことにバラバラになった兄を見ることはなかった。それでも血の臭いと叫び声が残っていた。僕は脳挫傷で危険な状態だった。大きな手術を三度受け奇跡的に助かった。

ルイに会うまでは僕が死んでしまったツバキだった。でも彼女に会ってから電車に撥ねられる夢を見るようになった。妹が地震で水没した関西地方で僕を待っている暗示だと思っていた。

僕は決断した。ルイの正体を知るために病院のデータにハッキングした。ルイは日本の関東出身で彼女の言い分は嘘でないことを知ってほっとした。それも束の間だった。僕は自分が何者であるか知ってしまった。

5か月以上前、特別病棟にツバキの弟が入院していた。名前はキサラギアオイ。強烈なフラッシュバックが僕を襲った。僕の心に闇が広がった。嘲笑。僕は兄を殺した。それが陸家の定めというならこんな国潰してしまおう。08年8月2日にニヒマルがいう世界では、僕の父が軍事クーデターを起こしたそうだ。じゃあ、今度は僕が父を殺す。失態。父は前日に韓国を離れ、日本のUN治安維持軍司令官として北九州へ発ったそうだ。父の重臣を三人粛清した。復讐は未完のままだ。

僕は合流したルイに殴られて目が覚めた。でもそのルイは発狂してまた昏睡状態だ。僕には死神が憑いている。

4 > 関門海峡封鎖戦(?)

私は泣きじゃくるカシマ少年にツバキが『生きる』と彼にしては熱い言葉を掛けた意味がわかった。ツバキとなった彼は死に場を求め

てここに残ったのだろう。ユウナはツバキを何も言わずに殴った。ツバキはユウナを睨み返した。わかって貰えない痛み。2人は似たりよったりだ。

「お前が生きていることに絶望しようが私の知ったことではない。お前の感情を私に押し付けるな。私は世界を客観的に見れるんだ」

ユウナは地に這いつくばるツバキを見下した。彼女は『反抗する側から』反抗される側』になった。

「ああそうかい、あんたらしいよ。あんたは親を殺せない。心と身体が離れてしまった生き霊みたいな生き方をしている内はね。せいぜい生まれてきたことを自省しなよ」

この2人は根本的に性格が合わないと感じた。もしかしたら死んだツバキとユウナだったら合っていたかもしれない。仕方ない、私は内心溜息を吐いた。

「2人とも死にたいなら、今すぐ市内へ突っ込め。出来ないなら、未来の使いである私の指示を聞け」

ユウナは私を恐れている。ツバキは曲がりなりにも私を信じてくれる。2人は態度こそ違え私に従った。しかし未来は曖昧だ。ツバキの告白が全てを崩した。とりあえず、2人の未来が私にとって過去である。過去は絶対的だ。

私は2人のために言った。

「無理に2人で協力しろとは言わない。お前達は2人とも覚醒者だ。それなりにクリーチャーと闘う力はある。作戦は簡単だ。2人で山口の部隊と合流しろ。私のデータではこの時代の山口の部隊長は相

当のキレ者だ。悪いことは言わないが、お前ら2人で小倉は制圧できない。彼らを利用しろ」

ユウナの目は世話しなく泳いで怯えていた。頷くのがせいぜいだ。一方でツバキは完全に開き直っていた。

「わかったよ。作戦開始は明日にしよう。もうじき日が暮れて行動範囲が狭まるし、奴らの餌食だ。僕は寝るから、悪いけどシノノメさんは見張りに立ってくれ」

僕を見捨てて単独行動しても構わないという挑戦的な態度だ。何となく私は苛々した。ユウナは機嫌の悪い顔の割にツバキの要求を飲んだ。私は警戒した。この女何を企んでいる。ツバキは私を首から外すと本当に寝てしまった。私を盗んでもいいとユウナを挑発している。私はすぐにユウナの顔色をうかがった。怒ってはいない。むしろ、ひどく疲れた顔をしていた。素のユウナはツバキの言うとおり生き霊のようだ。私はルイがキールに幼い反抗をして強く言い過ぎていたことを思い出した。もしかして。

「お前、私よりもアオイが恐いのか。昔見た光景に似ているもんな」

性格にはアオイそのものではなく、アオイに裏切られたらどうしようといったことだろう。少なからず言葉は足りないがユウナはツバキに好意をもっていた。この時代の女の子は、ルイもだが不器用だなと私は思った。

「私…1人になるのが恐いの。信じていたヒトに裏切られるのが…もう嫌なの」

私はユウナが寝ているツバキに悟られないように声を抑えて泣く姿

に年相応の女の子によく見えた。ただ、ツバキがたぬき寝入りしていることも随分前から気付いていた。

なるほど、この2人はかわいそうなほど似ている。素直に協力しあえばいいのに。私は人間特有の面倒臭さを思わざるを得なかった。ツバキはルイに冷たくされてもつきつきりで介抱するくらいお人好しだ。悪気はなかったが否定されたから冷たく言い放ったようだ。そうでないかと寝たふりをしながら、涙をこらえないだろう。前言撤回。この2人は上手くやっていけるだろう。

「人間とは本当に苦しい存在だな。少なくとも私は同情するよ」
泣き疲れて寝てしまったユウナの代わりに、文句も言わずにツバキは寝ずの番をしていた。見てはいけない女の涙。この時代の男も相応不器用だ。

朝から2人は険悪な空気だった。きっかけはルイがユウナの仲間を傷つけたことだった。私はお前のようななよした男の気に引かれて単独行動してしまったと言う。言葉が悪いのだ。ツバキは兄譲りで愚直な男だ。当然怒る。それもルイを酷い奴呼ばれされたことに対してだった。

「君はヒトの心を持ってないのか。さつきから聞いていれば、負傷者そつちのけでクリーチャーのコアつてのを追っていたとしか聞かない」

クリーチャーのコアとは小倉危機を起こした母体、ウイルス感染の発生原因となったものだ。クリーチャーはヒトで言う『心』『感情』『欲求』を持たないから奴らから攻撃してくることは、この時代ではないはずだった。もう適者生存の進化が始まっているのか。ユウナの話は傍観者として興味深い。ユウナはツバキを鼻で笑い一蹴し

た。

「負傷者？いや感染者だろう。お前も逃げている最中に見ただろう。死にかけや元人間の殺し合い」

クリーチャーは生命の危機を感じたときだけ攻撃してくる。何かきつかけがあると興奮状態になり、ヒトに襲いかかってくる。映画のゾンビのように無差別に襲いかかってくることは珍しい。しかし、感染者は別だ。ウイルスで脳の摂食中枢を破壊された生き物はそのゾンビのように噛みついてくる。奴らに襲われたヒトは恐慌状態なので、ウイルスにより凶暴化して他のヒトを襲う。つまり何もしないのに襲ってくるクリーチャーは元人間か元ペットの犬猫などと定義できる。それにゾンビ化する人間もまれである。たいていの人はウイルス感染とともに全身の穴という穴から出血で死ぬ。ユウナは冷静に分析できている。大したものだ。

「ヒトがヒトを殺すなんて想像できないよ」

あいにくツバキは死にかけたヒトしか見ていない。ユウナは困惑するツバキに吐き捨てた。

「安心しろ。ウイルスは24時間以内に感染者の全ての細胞を殺す。だから、一日経てば感染者は地上から消える」

しかし実際そうだろうか。ネズミ講式に感染していったら、そこはホラー映画のゾンビの群れに入るようなものだ。うつむいたままツバキは語る。

「君はヒトがクリーチャーになって、ヒトを殺すのを何度見てきたんだい。どうしたら、躊躇いなく彼らを殺せるのかな」

「私はトウキョウ、ナゴヤ、オオサカと流れてきた。生きる術は道中で学んだ。全ては時間が解決してくれる」

「それはどうかと思うよ…僕は一生慣れたくないね」

ツバキはようやく立ち上がった。いよいよ出発もとい出陣か。ユウナはツバキにも銃を手渡した。あの頃のルイと違い、発砲経験のあるツバキは無言で受け取る。ユウナは手際よく支度をしながら私に視線を送った。

「おい、未来のペンダント。後どれくらい九州地方に時間が残っている」

「北九州は今日を入れて4日。一か月後には阿蘇一帯が噴火で水没する」

なぜ時間を気にするかわからないのはツバキだけだった。わからない奴はユウナ先生の話を聞くように。

「クリーチャー災害と自然災害、特に地震は何らかの因果関係があるようだ。一か月も経たないうちに九州は地図から消える。言わば日本列島がクリーチャー汚染している」

ツバキはユウナの言葉で顔色が青くなった。クリーチャーは死の使い魔だ。災害を呼ぶ。ユウナは市街地を目指してさくさく歩きだした。素晴らしく躊躇いのない肉食系女子だな。ツバキは私を首から下げて後を追った。果たしてこの現実を快く受け入れた人間は何人だろう。

5> 関門海峡封鎖戦(?)

私たち一行は覚醒者のユウナの持つ能力、クリーチャーの特定周波数^ズを感知する能力で生き残りを追跡していた。まだ戦闘中の場所に

山口の部隊もしくは北九州の残存兵がいると踏んだ。

被災民の死体があちこちに放置される無残な世界だった。目や口、それに耳と鼻から血を流した跡が固まって黒ずんでいた。充血した目のまま、ついさっきまで生きていたような叫びの形の遺体。もがき苦しんで首に引つ掻いた跡が生々しく残っていた。ゾンビとして今にも起き上がりそうな感じた。ツバキと私はこみ上げる嫌悪感を抑えつけながら死体を避け歩く。ユウナは平然と死体の中を歩いている。彼女がこういう光景に慣れていると言ったのは本当だ。ツバキは死臭でこみ上げる胃液を手で必死に抑える。ぐふ。息が酸っぱい。

「どこまで歩くんだよ。僕はこんな地獄絵図の当事者になりたいわけじゃないんだ」

怒りがすぐ静まる。今日の自分は明日ここに転がっているかもしれない。昨日助けられなかった骸が自分を死へ誘っている錯覚に襲われる。ようやくユウナは廃校と化した公立高校の門の前で立ち止まった。逃げ遅れた制服の若い遺体が転がっていた。ユウナはクールに言った。

「ここが目的地らしい。壮絶な殺し合いだな。まさにゾンビVS人間の最終戦争だ。ここは血で血を洗う戦場だったようだ」

そうか… そうだな。心臓辺りに刺さった鉄パイプ。血まみれのバット。半身が人間のままのクリーチャーの死体。それに上履きを履いたまま千切れた足がサッカーのゴールポストに引っかかって揺れていた。助けを求めているであろう右手首が私たちに向いていた。

ユウナは逃げずに惨劇の道を歩く。こんな場所に生存者がいるのか。

それともまだクリーチャーがうろついているのか。

「ああ私たちと同じ臭いを持つ生存者がまだ闘っているようだ」

ユウナは惨劇の道でくると振り返って私たちを白い目で見る。何かを量られているようだ。恐らくツバキの男としての度量だ。

「お前、まだヒトなんだ。どうする、半分人間のクリーチャーに襲われたら迷わず殺せるか」

「そんなはずはない、僕はもうヒトでないよ。体液が白くなっていた」

ユウナは手に持っていた日本刀でツバキの手の甲を串刺した。ぐあ。赤い血が流れる。普通そんなことするかよ。

「これが現実だ。昨日、クリーチャーどもの庭を無傷で逃げ切ったのは奇跡だと思え。ここに甘えない。敵は殺せ、いいな」

と言いつつツバキの手の甲を止血している。ほお意外にこんな恐い奴でもハンカチくらいは持っているようだ。そもそも彼女は馬鹿な人間は殺してもわからせる性格らしい。眉間にしわを寄せ、半目で歯ぎしりするツバキは怒りで震えていた。無茶苦茶な女だもんな。ツバキは落ちていた血まみれのバットを拾いユウナに殴りかかる勢いで向けた。

「正気じゃない世界でも君の凶行を許せない。今度同じことをしたら、こいつで君を死ぬまでめった打ちにする」

「どうぞ勝手にしろ。だが私の刀より血に飢えた奴らの爪と牙に用心するんだな。すぱつとあの世逝きにならないように男のプライド見せな。しっかり闘え」

ちぐはぐコンビは血に染まる校舎へ入っていった。ユウナは廊下に転がる死体を黒のブーツや刀でひっくり返して進んだ。首裏の死斑を見ているそうだ。ツバキはおっかなびっくり血の池地獄を避けて彼女に続く。血の臭いに彼は咽る。流石に顔色が陰しくなっているユウナは尋ねた。

「最後の防衛線を校舎で張るならどこだろうか」

「たぶん屋上か鍵のある部屋だろうね」

「そうだろう。しかしさつきから気になっているがこの蜘蛛の糸はなんだ。うざったくて仕方ない」

ユウナは昨日一日で蜘蛛の巣は出来るものかと考えていた。普通に生きている生徒が学校生活するなら掃除はするはずだろう。蜘蛛の糸を辿って血の廊下を進んだ。グオオ。一つ曲がり角の廊下の向こうから何か獣のようなうめき声が聞こえた。ユウナの目の色が赤くなる。警戒レベル特上で覚醒した。この角の向こうに狩るべき対象がいる。ユウナは駆ける。ツバキはバットを握りしめ続く。

「行くぞ、へたれ皇子！」

「誰がへたれだ！」

ツバキは血まみれバットでクリーチャー化した兵士の頭を砕き飛ばした。5匹の元人間。そいつらは蜘蛛糸の壁の向こうへ行きたいらしく爪を振るっていた。ユウナは瞬時に二匹の首を長身の日本刀で切り捨てた。居合い切り斬殺。残る

は三匹。一匹がツバキを襲う。バットで噛みついてきた牙を止める。次は爪がツバキの首を狙う。4番バッターバット強振。

「貴様なめんなよおっ！」

窓ガラスへ勢いのまま叩きつける。クリーチャーは中庭の木に落ちて串刺しになった。やはりユウナは闘い慣れていた。大振りの敵の攻撃を見切って受け流し、カウンターで廊下を這うような一閃を放った。真つ二つになるクリーチャーは体液を飛ばし崩れた。ツバキの背後から爪が襲おうとしていた。ユウナは気付いたが間に合わない。

「おい、伏せる！」

ツバキはその声に即座に従って伏せた。クリーチャーの爪は宙を空振り、代わりに銃器の弾丸が数発命中し、奴の身体が撥ねて沈黙した。

「こいつで終わりだ」

その男は屈強な自衛官だ。襟章からすると陸上自衛官の二等陸佐くらい。兵らしい。血の気が抜けないユウナは長物を彼に向けた。

「あんたか、私を導いたのは」

ツバキはユウナに冷静になって刃を納めるように言った。

「助かりました。かなり危ういところでした。私は韓国軍の陸葵です。アオイって呼んでください。この人は軍が要請したクリーチャー狩り師のシノノメユウナです。血の気が多いですけど決して悪いヒトではないです」

ユウナも私もきよとんだ。ツバキの女声と敵を作らない笑み。軍装のツバキは線が細く女でも通りそう。二佐はどーでもよさそうに

頭をぼりぼり掻いた。若干照れ隠しのようだ。

「ああ、俺は山口の救援部隊できた陸自の曹司雄飛^{ソウジュウヘ}二等陸佐。小隊長はクリーチャー化して死んだんで一応部隊長だ。あと、その繭の中にいるのが…」

ぼりぼりと糸の壁を剥がして中から軍装の身長が小さい前髪ぱつっんのショートカット娘が出てきた。

「あ、あたしはヤナギ一等陸曹だす。アオイさん、シノノメさん助けてもらってありがとだ」

蜘蛛系の方言使い。顔と口調がギャップ者だ。さてとソウジさんがナルシストっぽく細い目でたばこをふかした。

「仕方ねえが撤退すつか。小倉の市民も兵士も自分のとこの火事を無視して逃げちまうし、隣の県のよしみもここまでだ。高校生の化物と闘って俺とヤナギ以外戦死じゃ格好つかん」

ツバキは慌てた。一方でユウナは余裕の澄まし顔だ。ヒトを怒らせるプロのユウナの語りは本心を見抜く。

「自尊心が強いヒトですね。あなたは元々山口にいたヒトではない、だから隊長や仲間が死んでも平然としてられる」

何、挑発している。私が言った山口の隊長はもう死んでいる。こいつは偶々生き残った奴だ。冷静になれよ。すると二佐は腹を抱えて笑った。

「くだらねえ、くだらねえな。そうだよ、俺はあの東京から逃げて

きた逃亡兵さ。そして運良く今日まで生きている。生き延びるためには部下も上司もいるかよ。くそつたれだ」

ここまで口を閉ざしていたヤナギが割って入ってきた。涙交じりに言う。

「違う。ソウジさんは名古屋であたしを助けてくれた。それに仲間の死を誰よりも悲しんでる。ここに突入したのだって、救難信号を知って、誰も賛成しながったけど1人でも助けるために……」

「黙れ、リュウ！」

ソウジは頭を抱えた。クリーチャーは憎い。俺から全てを奪った。部下、上司、陸自の仲間。そして帰る場所も。だがな、小倉のクリーチャーは変だ。こいつらと闘ってもきりがない。

「どういう意味ですか」

ツバキは尋ねた。ソウジは頭を抱えて唸った。

「わかんねえよ……何故、クリーチャーどもはぶち殺しても時間が経つと復活するか。きりがねえ、あいつらは生ける屍だ」

リビングデッドゾンビ……ユウナには思い当たる節があるようだ。

「クリーチャーが出す周波数おしは覚醒者が察知できる。この理屈だ」

ツバキ以外は頷く。ツバキは2人が覚醒者なのを知って疎外感を受けた。ユウナは寂しい男を置き去りに続ける。

「ある一定周期ごとにその受信量が倍に増える。死体が再生しないとその節理は説明つかない。このとき、直前に何らかの音が聞こえ

「た気がするんだ」

呆然から戻ったヤナギが反応を返す。

「音：確かに聞こえた。ハンドベルのようなチャイム」

ツバキ1人だけ聞こえない音にしゅんとした。みんな興奮気味なのに。とほほ。ツバキをスルーしてユウナは結論付けた。

「つまり、チャイムを鳴らす本体を叩けば無駄な闘いは終わる。いつクリーチャーが再生して私たちを襲ってくるかわからない。すぐ本体を叩きたい。ニヒマル、本体が居そうな場所はどこだ」

「おいおい、私が話したら山口の奴らが変な顔するだろう。ふう仕方ない、一番怪しいのは小倉駐屯地だ」

私の予測計算は雑だが良く当たる。一行はクリーチャーを倒しつつ、途中で車を拾い小倉駐屯地へ向かった。そこで待っていたのは意外な人物だった。異常現象の答えを知る人物だったとも言える。

6 > 関門海峡封鎖戦(?)

再生できないくらいバラバラにされた死体。いくらなんでもやり過ぎだ。四人はそれぞれの表情で死者を悼んだ。返り血まみれのスーツの女。こんな華奢な細腕が次々と半クリーチャーどもを解体していったらしい。

「あら、遅かったじゃないの。キサラギ、シノノメ、それに使えないPC端末とおまけが2人。たく、何度こいつらを微塵切りにしたと思っっているのよ」

彼女はなめ回すように私たちを見た。確か彼女は死んだはずのツバ

キの元秘書だった。

「いいえ、私の名前は宝来夏希よ。^{ホウライナツキ}6月13日にそのシノノメユウナに斬り殺されかけたシノノメ教授の助手って言えばわかるかしら。私はキサラギアオイとシノノメのお嬢さんが結託しないように教授から頼まれていたんだけど、もうどうでもいい話よ」

なるほど前世での黒幕はシノノメ教授か。私とルイの予想を超えていた。ツバキは韓国兵をバラバラに殺害されて怒りが頂点にきていた。バットで殴りかかる。ナツキは余裕の片手でバットを止める。偽りの困った表情だ。

「シノノメ先生はどこまで未来を見据えているのかしら。小倉のノンキャリアを音で全員クリーチャー化させる研究をするなんて偉大な構想だわ」

金属バットがリンゴのように握撃で潰される。グシャ。有り得ない怪力だ。驚愕のあまりツバキは腰が抜けて地面にへたれこんだ。ユウナは怒りを押し殺して言った。

「お前はあんな気違いの肩を持つのか。またふざけた頭でヒトの命を軽視した実験をしたんだぞ」

「そうとも言えるのかしら。もう実験は失敗だわ。さっさと到津の森に行ってコアを破壊したら。そうしたら遊んであげる」

ユウナは無表情のまま虎徹を振り下ろした。ツバキのときより楽々に二本の指で刃を止める。

「良い筋だわ、ユウナちゃん。私はサイボーグなのよ。闘うなら本気できなさい。続きは…八幡製鉄所で待っているわ」

彼女は軍用ヘリに乗り込むと1人で操縦し飛び発った。

「追わなくていいのか」

ソウジはたばこを吹かした。ユウナは力の差を知った。空間認知能力を駆使してもユウナは戦闘能力ではナツキに敵わない。空間認知能力とは科学的にユウナが相手の動きを予測できる力のことだ。冷静に計算した上で勝てない相手。ユウナは手に汗を握った。

チャイムが鳴る。ヤナギは肉片が動いているのに気付いた。気持ち悪い。音が無理やり動かしているのだ。

「ソウジさん、また鳴っただよ」

「ああわかつている。早めに蹴りをつける必要がある。だが、この車両はポンコツばかりだ。エンジンがかからない」

軍用車両はナツキが暇つぶしに破壊していた。ツバキはナツキの心を読んだ。いや彼女なら一台だけ生かす。端の車両のエンジンがかかる。Ready.

「みなさん、一番左端の車は大丈夫みたいです。これで行きましよう」

運転はソウジに任せ、助席にツバキは座った。残る2人は後部席に収まった。ヤナギが手から糸を出し、あやとりをしている。ユウナは科学者の娘だ。気になってうずうずしていた。気付いたヤナギが話しかけてくれた。

「蜘蛛の糸の話知っているだか。地獄に落ちた人間が生前蜘蛛を助けたことで助かった話だ」

「いや、後から糸を昇ってきた奴らを蹴落とした罪人がお釈迦さまの怒りを買ってまた地獄に落ちたんだ」

「そうだな。私の一族は蜘蛛の呪いを受けたかもしれないべ。この能力で今までいじめられたこともあったけど、逆に今は救われている」

それじゃあ、ここは地獄か。ユウナは目を伏せた。ユウナは地獄では笑えない。ユウナの罪。今更、切り捨てた人間に怨まれてもどうしようもない。車両は到津の森公園の前で止まった。それでも今は進むしかないのだ。

7> 関門海峡封鎖戦(?)

ここは動物園とアトラクションが並立する公園だった。今そこにあるのは無数の目を持つ巨大な球体だった。何だこれ。私たちは車の外に出て呆然と立ち尽くした。異様な空気が流れている。動物園なのに気配がない。まさか。

「そのまさかだ。あれが動物の末路ってか」

ソージはたばこを吹かしている。この状況でよく余裕があるもんだ。私たちは四方八方を元人間と客寄せパンダに囲まれていた。ゾンビパレード。

「僕はまだ感染していないんだ。あんな神経いかれたゾンビになりたくない！」

「騒ぐな！いいか、こいつらをヒトと同列に思うな。チャイムが鳴ればいくらかでも復活するクズ生物だ。テキトーにあしらえ」

ソージがゾンビを銃で撃ち抜いた。ゾンビ共は興奮状態になる。戦闘開始。ヤナギ、ユウナ、ソージは落ち着いて奴らの脊髄が走る正

中線を撃ち抜く。一方でツバキは錯乱してバットを大振りしている。こいつ、早くなんとかしないと。死ぬぞ。ヤナギがギリギリのところで蜘蛛糸を放ち、奴らの足止めをする。

「ちつ、私としたことが、車の中に虎徹を忘れてしまった。何故、表面積の当たりが少ない銃を選んだんだ。もう弾切れだ」

「無駄撃ちすつからだべ。車までの道開けっから、あどは何とかせい」

ユウナは疾走した。蜘蛛糸がゾンビ共の動きを一時的に止める。何とか車に滑り込むが解放されたゾンビがなだれ込む。ユウナは靴で蹴り飛ばし、虎徹を手取る。平突きでゾンビの頭を吹き飛ばし車外へ出る。

「シノノメ、車から離れる。そいつを爆破してこいつらを足止めする」

ソージは空き缶を手拾い上げた。念心、物質変化、爆雷。ソージの血液を使いそれはダイナマイトに変わる。ユウナは目を見開いた。左目が燃え上がるように赤く染まる。半覚醒。大振りで宙を切り裂く。離脱。ダイナマイトがエンジンの下へ放り込まれ、大爆発した。その隙に彼女たちはその場を離脱した。

チャイムがまた鳴った。先程倒した奴もバラバラに切り刻んでいない限り、再び立ち上がる。彼らは中型の熊のようなクリーチャーに追われ、二手に分かれていた。ユウナとヤナギ、ツバキとソージだ。

ユウナはヤナギの蜘蛛糸で手足を縛られた熊を虎徹で胴から切り捨てた。

「災難だな。ここが元動物園と言うことを失念していた。この手のクリーチャーが次々と襲ってくる」

「それとチャイムを出す本体を叩かない限り、こいつらはまた復活するだ」

虎徹じゃ、あの馬鹿みたいに巨大な目玉お化けをぶった切るのとは不可能だ。ユウナは表情を曇らせ、自分の武器を見る。目玉お化けなんかにはやられてたまるか。ユウナは自分ならできると見上げた。

その瞬間だった。ズドーン。目玉お化けにバズーカ砲から放たれた誘導弾が直撃する。

「隊長だべ」

ヤナギは目を輝かせた。何とかできそうだ。ユウナたちは音の発射点へ走った。

ツバキはホームランバットを諦め、ショットガンを使って迫りくる猛獣を駆逐していた。射撃の腕に自信がないのでバットで闘っていたが、訓練を受けて無駄撃ちしない分、ユウナよりセンスはあるようだ。

「僕に力が足りないのか」

ツバキは絶望した。彼が逃げた方向はゾンビパレードだった。倒しても倒してもきりがない。弾切れ。畜生、僕は本当についてない。

「伏せろ、アオイ！」

デジャブ。バズーカ砲が炸裂して目の前の敵がバラバラになった。

「よお、とんでもない方向に逃げたようだぜ」

ソージは苦笑いを見せた。ツバキは気付いた。

「あれ、ソージさんの武器が変わっている」

「ああ、これは俺の能力だ。血の代償に物質を変化させることができる」

ソージは覚醒者になったとき、武器を自分の血で変化させる能力を得た。ただし、リستカットして血を使う分、体力の消耗が激しい。それに貧血の立ちくらみ。ソージは膝をついた。

「ソージさん！」

「大丈夫さ。それより目ん玉をどうにかしねえとな」

血を使い過ぎている。ソージの目の色が霞んでいく。このヒトは東京で部下を見殺しにして敵前逃亡するような心の弱いヒトでない。今だって血を使って仲間のために死にかけている。兄さん、僕は僕の力を、如月の水術を信じたい。ツバキの目は幻影を見た。白昼夢。水風船が割れる、小さい頃の記憶。

「あいつを破壊する方法があります。奴の体内の内圧を上げて破裂させます」

「そんなことができるはずがない。できたらもうやっているさ、あいつにはバズーカ砲も無力だったんだ」

ソージの息は絶え絶えだ。出来ないことはない。それは兄さんが教えてくれた。

ツバキは落ちていたスチール缶に神経を集中させた。念心。スチー

ル缶は風船のように爆ぜた。

「出来ますよ。僕は如月水術の免許皆伝、キサラギツバキですから」

ユウナたちが合流した。ヤナギは死にかけのソージに縋りついた。

ユウナはツバキの変化に気付いた。右目が赤い。自分と同じ半覚醒者だ。雰囲気が変わったように思える。唾を飲む。

「時間がない。さっさと終わらせよう」

ユウナはその作戦は物理的に不可能だと言った。仮定としてツバキの能力で目玉お化けの体内圧を上げたでしょう。しかし、あの皮膚はバズーカの誘導弾さえ効かない。つまり、外圧が変化せず破れない。

「やってみなければわからない。それにソージさんの体力は極限だ。僕らが仲間のために闘うときだ」

そうだな。それにチャイムは待ってくれない。ユウナはソージが使っていたバズーカ砲を持った。結構な重量だ。対戦車両迫撃砲か。

「原理的には可能だ。内圧を上げて外から穴を開ける。言葉では簡単なものだ」

ユウナはバズーカを構えた。ヤナギはソージの側で祈るような目で見ている。やるしかない。いや、僕にしかできないんだ。目を見開く。念心。奴の体内の臓器が浸透圧の上昇で過膨張するのが見えた。

「今だやれ、ユウナ！」

「くたばれ、クソ目玉！！」

ミサイルは直撃した。しかし穴は開かない。いや、闘う人間はもう一人いる。

「隊長の恨みだ。穴あけ、針千本!!」

ヤナギの目も赤く染まる。無数の尖った蜘蛛糸が奴に止めを刺した。目玉の怪物に突き刺さった。バン!! 巨大な水風船は爆ぜた。体液が四散して公園に降り注いだ。

「うえ、アンモニア臭い」

ヤナギは降り注ぐ液体の臭いに目を白黒させた。チャイムの消失とともに小倉を徘徊していたクリーチャーは次々と倒れて全滅した。小倉鎮圧成功。

nue S・D・F・ZERO? ?

T o b e c o n t i

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8941o/>

S.D.F ZERO ? - ?

2010年11月13日22時57分発行